

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 50)

甲

藤原俊成(一一一四～一二〇四)という歌人がいる。俊成の息子はかの藤原定家であり、鎌倉時代から南北朝を通じて勅撰集を編纂してきた二条家・京極家という和歌の家の祖に当たる人物である。

俊成は『源氏物語』について、きわめて印象的な言葉を残していた。それは『六百番歌合』にある以下の言葉である。

冬上十三番 枯野 左勝 女房(藤原良経)

見し秋を何に残さん草の原ひとつに変わる野辺のけしきに

右 隆信

霜枯の野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ

右方申云、「草の原」聞きよからず。左方申云、右、歌古めかし。

判云、左、「何に残さん草の原」といへる、艶にこそ待めれ。右、方人、「草の原」難申之条、尤うたたある事にや。紫式部、歌詠みの程よりも物書く筆は殊勝也。其上、花の宴の卷は、殊に艶なる物也。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也。右、心詞、悪しくは見えざるにや。但、常の体なるべし。左、歌、宜、勝と申べし。

「判云」以下が俊成の言葉(判詞)である。この二つの歌は、「枯野」という題で詠まれている。どちらがよいかを判定するのが判者たる俊成の仕事となる。結論は、女房(歌合では高貴な主催者(注1)の場合身分を隠して「女房」と記されることが多い)とされる藤原良経(一一六九～一二〇六)の「見し秋を」歌の勝ちとなった。通常、院・天皇をはじめとする高貴な人(この場合は「女房」と記される良経)は歌合では勝つことになっているから、この結果にそれほど驚きはないが、問題^Aは勝った理由である。俊成は判詞で藤原良経詠の「草の原」にひどく反応しているのだ。

まず、「左の歌(藤原良経詠)は、「何に残さん草の原」と言っている、これは艶(優美)でございます」と讚めている。そして、判詞の前に「草の原聞きよからず」「草の原」は聞きにくい、あまり聞いたことがない)とした「右方」の難陳(双方の方がそれぞれ相手の歌を批判したり評価したりすること)に対して、「右方」の人が「草の原」を非難するのは間違っている。紫式部は歌人以上に物語を書く能力が優れている。加えて、『源氏物語』「花宴」の巻はとくに優美なものがある。ああ、『源氏物語』を読まない歌人は遺恨(遺憾・残念、もつと言えば駄目だくらいの意味)のことだ」と嘆くのである。

はじめてこれを読んだ人は、どうしてここでトウトツに『源氏物語』が出てきたのか、不思議に思ったに違いない。種明かしをすれば、『源氏物語』「花宴」巻にこのような歌があるのだ。

女(朧月夜)

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ

この歌がでてくる直前には、光源氏がおぼろつきよの内侍に「なほ名のりしたまへ。いかで聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりとも思されじ」（やはり名乗りなさい、お名乗りにならないなら、どうしてご様子を伺うことができますか。といっても、このまま終わってしまうとは、あなたもお考えではないでしょうが）と語りかける場面がある。簡単に言えば、源氏はおぼろつきよの内侍を口説いているのである。それを受けてのおぼろつきよの内侍の歌であることをまずは押さえておきたい。

女は、源氏の誘惑に対して、このように、歌で応える。つらい身のままで世の中からふいと消えてしまったら、あなたは、私が名乗らなくても、私が葬られている草の原までお訪ねになることはないでしょうね、と。

この歌の直後、地の文では「と言ふさま、艶になまめきたり」（と言う様子が、優美でやさしい感じである）」とある。

女の歌は、恋のはじまりの段階によく出てくるタイプの歌である。男に対して、あなたって、あたしのことを本気で好きなわけではないでしょう、と相手の本心まごころを捜る意図がこの歌にはあるからだ。それにしても、女の歌の内容は、死ぬなどと表現的にややオーバーなのだが、『源氏物語』の地の文では、「艶」であると讃められてもいる。

I

な受け答えがよしとされたのかもしれない。

ここで、俊成の判詞に戻ると、「花宴」巻には、たしかに「艶に」という言葉があった。俊成は、良経の歌を「艶」と讃め、『源氏物語』「花宴」は「殊に艶」であると言っている。それはこの場面を指すと見てよいだろう。つまり、俊成は、良経の歌から『源氏物語』「花宴」のこの箇所を思い起こして、おそらく良経も同様にこの場面から「見し秋を」歌を詠んだに違いない、と考えたのだ。それから一步進んで、『源氏物語』を読まない歌人は駄目だ」というように、基本的教養としての『源氏物語』を知らない歌人を批判する言葉が出てくるのである。

以来、俊成のこの言葉は一人歩きをして、歌人であるなら、『源氏物語』の素養が不可欠であると思われるに至っている。だが、歌を詠んだ当人である良経は、本当に『源氏物語』から「見し秋を」歌を詠んだのだろうか。まずは、この歌を解釈することから始めてみたい。

見し秋を何に残さん草の原ひとつに変わる野辺のけしきに

歌の内容は、見た秋をいったい何に残したらよいのだろうか。花が咲いていた草の原もまるつきり変わってしまった野辺の景色のなかで、というものだ。花が咲き誇っていた草の原も「枯野」の題通りに、今ではすっかり枯れ果てている。だから、かつて見た秋の美しい風景はどこにも残っていないと言っているのである。

この歌と『源氏物語』「花宴」の「うき身世に」の歌とでは、「草の原」が共通するが、強いて言えば、「ひとつに変わる」と「やがて消えなば」と意味的に近いことは言えるかもしれないが、和歌の達人である良経であっても、『源氏物語』の「うき身世に」歌から、「見し秋を」歌を思いつくことはかなり大変なことだろうし、仮にできたとしても、想像を絶する

II

を要したことだと想像されよう。

とすれば、良経が何に拠ってこの歌を詠んだのだろうか。ちょっと困ってしまうが、『源氏物語』

の影響下で生まれた『狭衣物語』さしやものごと 卷二冒頭にある歌に目を向けると、別の視界が開けてくる。

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

「尋ぬべき」歌は「草の原」「問はまし」とあるから、『源氏物語』「うき身世に」歌から想起されて詠まれたものだろう。しかし、大きな違いもある。それは「霜枯れて」という言葉が『狭衣物語』の歌にはあることだ。そして、この「霜枯れて」が良経詠と深くつながっていくことに気づいただろうか。

私は、良経は、『源氏物語』よりも、『狭衣物語』の「尋ぬべき」歌を見て、「見し秋を」歌を詠んだと推測している。その理由は、やはり「霜枯れて」という言葉である。これが歌の題である「枯野」とそのままつながっていくからだ。

(注二)

となると、俊成はどうして『源氏物語』をこの歌の本歌と言ったのか、という新たな問題が出てくることになる。俊成が『狭衣物語』の歌に気がつかなかったというのが一等わかりやすい答えだが、これではおもしろくない。「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」と高らかに言い切っている俊成の態度から、私は俊成の別の狙いを考えてみたい。

乙

それは、『源氏物語』という古典を重視せよという俊成の強い主張である。『源氏物語』が古典、言い換えれば、皆が知っておかなくてはいけない権威のある書物となったのは、実はそう古いことではない。安元元年（一一七五）に三十八歳で亡くなった世尊寺伊行が『源氏釈』という注釈書を残しているが、これが『源氏物語』の最初の注釈書である。古典とは注釈のある本のことだが、『源氏物語』の成立がだいたい寛弘五年（一〇〇八）前後とされているから、最初の注釈が出るまで最低約一六〇年くらい経っている。つまり、その間は読まれることには読まれたが、注釈書が作られるほどは重視される本でも、権威のある本でもなかったということを示していると言っているだろう。

ましてや、『源氏物語』から七十年前後経ってから成立した『狭衣物語』となると、読み物としては、かなり読まれて（当時、読むことは書き換えを含むから、書き換えられて）しまい、定家の時代には、基準となるテキスト（証本・定本）を作ることができなくなったほどだったというが、『狭衣物語』も決して上記で言う古典ではなかったのだ。

だが、『源氏物語』の方は、俊成に至ると、彼は堂々と『源氏物語』を顕彰するようになる。つまり、「源氏見ざる歌よみ」云々の言葉は、言ってみれば、『源氏物語』古典化宣言ということになるだろう。

この頃、俊成は別のところで、こんなことも言っていた。著名な俊成の代表歌に

夕されば野べの秋風身にしみてうづらなくなりふか草の里

という歌がある。この歌を俊成は、『慈鎮和尚自歌合』の中で、『伊勢物語』一二三段に基づいて詠

んだことを告白している。

それまで、古歌と言ったり、古物語などとぼやかして言うことはあったが、俊成になると、そうではなく、正しく『源氏物語』や『伊勢物語』と作品名を言うようになる。この違いはゾンガイo大きいのではないか。なぜなら、そこに、ほんやりとした古典意識ではなく、はっきりとした明確な古典意識が窺うかがわれるからに他ならない。俊成は、『伊勢物語』・『源氏物語』は古典であり、今後和歌を作る上で一等大事な源泉である、だから、皆も勉強して己の素養とせよと言っているのだ。

俊成の息子である定家は、『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』という三代集のみならず、『伊勢物語』・『源氏物語』の校訂本を作成した。他にも『更級日記』や三卷本『枕草子』の校訂本も作っているが、そのなかで、『古今集』・『伊勢物語』・『源氏物語』の校訂本を作ったことは、父の意志を継いで、古典の核になる書物を整備し、これこそが読むべき古典的書物なのだ^oと決めようとしたことをニョジツoに示していよう。以後、『古今集』・『伊勢物語』・『源氏物語』(加えて『和漢朗詠集』)が日本の代表的な古典となっていたのである。

してみると、古典gというものは最初からあるわけではないのだ。俊成・定家のように権威のあるだれかが高らかに古典を重視せよ、これが古典だ、古典を知らない^oと駄目だと主張し、周囲の人がそれを受け入れることによって、古典が作られていくのである。俊成の行為は、その意味でカッキoテキoだった。日本において、古典と和歌によって、院・天皇の下に権力のある集団(公家・武家・寺家)が繋がれていく、即ち、古典的公共圏が生まれるのは、おそらく後嵯峨院ごさががの頃(一二五〇年前後)だと考えているが、その先駆けをしたのが、俊成であり、定家ということになるのである。

最後に、どうして俊成は『源氏物語』『伊勢物語』を古典として仰げ、と叫んだのだろうか。おそらく、ある起源的書物を持たない限り、我々はヒョウリュウoしたままになって根無し草になってしまうという危機意識がそこにあったのではないか。俊成の生きた時代は、長く平和だった時代が終わり、保元・平治そして治承・寿永の内乱fがボツパツfするという戦乱の時代でもあった。そのような激動の時代に生きるには、明確な基準がある。それが古典ということになる。古典さえあれば、我々は過去と今をつなぐことができる。つまり、アイデンティティーを確保することができるのだ、と俊成は考えていたのだろう。俊成にとって、古典とは、生き、活動する原点にあるものだったのだ。

(前田雅之「なぜ古典を勉強するのか」(文学通信2018年)

(注一) 歌合：和歌を詠む人が左右に分かれ、どちらが優れているかを競うもの。

(注二) 本歌：古歌をもとにして和歌を詠んだときの、そのもとの和歌。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～f のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a トウトツ

b ゾンガイ

c ニヨジツ

d カッキテキ

e ヒヨウリユウ

f ボツパツ

問2

空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解

答番号は

① 針小棒大

② 絶体絶命

③ 笑止千万

④ 荒唐無稽

⑤ 自画自賛

⑥ 一所懸命

⑦ 当意即妙

⑧ 人畜無害

問3

空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解

答番号は

① 気力

② 意欲

③ 手本

④ 飛躍

⑤ 体力

⑥ 素養

⑦ 見本

⑧ 視野

問4

傍線部 A 「問題は勝った理由である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうち

から一つ選べ。解答番号は 。

① より身分が高い人の方が勝つことになっていること。

② 女房が、実は高貴な男性であることが判明したこと。

③ 難解とされる『源氏物語』に着目したこと。

④ 誰も注目しなかった「草の原」の魅力に気づいたこと。

⑤ 『源氏物語』の和歌から「草の原」を引用したこと。

⑥ 当時気に入っていた「草の原」という表現を用いたこと。

問5 傍線部B「この場面」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 10。

- ① 『源氏物語』 「花宴」巻で、光源氏が朧月夜内侍の死ぬ直前に和歌を贈った場面。
- ② 『源氏物語』 「花宴」巻で、朧月夜内侍に拒絶された光源氏が和歌を詠んだ場面。
- ③ 『源氏物語』 「花宴」巻で、光源氏に口説かれた朧月夜内侍が和歌で応じた場面。
- ④ 藤原良経が高貴な男性という身分を隠し、女房のふりをして和歌を詠んだ場面。
- ⑤ 藤原良経が当時評価されることがなかった「草の原」という風景を詠んだ場面。
- ⑥ 藤原良経が、天皇のような高貴な人を歌合で勝たせるためにわざと負けた場面。

問6 傍線部C「良経は、本当に『源氏物語』から「見し秋を」歌を詠んだのだろうか」に対する

答えとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 当時の歌人は『源氏物語』の教養が不可欠であったので、『源氏物語』の知識を有している証拠として表現を引用した。
- ② 当時の歌人は『源氏物語』の注釈書を携えていたので、和歌に詠みたい表現を容易に検索でき、引用することができた。
- ③ 当時の歌人は『源氏物語』以外の古典から引用することが禁じられていたので、表現の出典は『源氏物語』だけである。
- ④ 『源氏物語』の「見し秋を」歌は当時の歌人にはよく知られていたため、容易に表現を用いることができた。
- ⑤ 歌語や歌の題の共通点から、『源氏物語』の影響を受けて成立した『狭衣物語』の和歌が典拠とされた。
- ⑥ 幅広い古典の知識を披露するため、『源氏物語』ではなく、その影響下で生まれた『狭衣物語』から引用した。

問7 傍線部D「俊成はどのようにして『源氏物語』をこの歌の本歌と言ったのか」に対する答えとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **12**。

- ① 和歌に用いられている語や状況から、『狭衣物語』よりも『源氏物語』の方が本歌にふさわしいと考えられたから。
- ② 『狭衣物語』は読み物としてはかなり読まれており俗語も含まれていたため、本歌とするにはおもしろくなかったから。
- ③ 『狭衣物語』は『源氏物語』の影響下に成立した亜流であり、表現としては高く評価されることがなかったから。
- ④ 『源氏物語』こそ、皆が読むべき権威のある書物として位置づけたいという俊成の意図が隠されていたから。
- ⑤ 『源氏積』という注釈書が『源氏物語』の権威化を目指して作成されたため、俊成もその目的に従ったから。
- ⑥ 『狭衣物語』にも類似表現は存在するが、『源氏物語』以外の出典は認められない時代であったから。

問8 傍線部E「上記で言う古典」に該当するものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- ① 『狭衣物語』
- ② 『源氏積』
- ③ 『慈鎮和尚自歌合』
- ④ 『平家物語』
- ⑤ 『更級日記』
- ⑥ 『伊勢物語』

問9 傍線部F「顕彰する」の意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 精緻な分析を加える
- ② 自分の宣伝に用いる
- ③ 権威ある注釈を付す
- ④ 功績を世に知らせる
- ⑤ 古典として信奉する
- ⑥ 己の素養として示す

問10 傍線部G「古典というものは最初からあるわけではないのだ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥から一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 『狭衣物語』のように、読むだけではなく、読者自身が本文を書き換えながら享受していく動きの中で自然と作られていくものが古典である。
- ② 『源氏物語』成立後、七十年前後して『狭衣物語』が作られたように、前の時代の作品に影響を受けた新しい作品が次々と作られていくのが古典である。
- ③ 院・天皇のような権力のある集団が愛好した物語が、権威のある本として周囲に認められ、広まっていったものが古典である。
- ④ 古典とは、俊成・定家のように権威のある人物が、皆が知っておかなくてはならない書物だと主張した結果、周囲に認められていったものである。
- ⑤ 古典とは、藤原定家が父の意志を継いで、本文を整備していったものに限られ、代表的な作品として『古今集』・『源氏物語』などが挙げられる。
- ⑥ 古典とは、過去と今をつなぎ、天皇家や貴族としてのアイデンティティーを確保するため
に成立した起源的書物のことである。

問11 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 誤解された俊成の言葉
- ② 一人歩きした俊成の言葉
- ③ 意表を突いた良経の言葉
- ④ 絶賛された良経の言葉
- ⑤ 「艶」なる源氏の言葉
- ⑥ 模範とされた源氏の言葉

問12 空欄 乙 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 藤原定家の古典復興活動
- ② 歌人たちの古典復興活動
- ③ 『狭衣物語』の古典化宣言
- ④ ぼんやりした古典意識の理由
- ⑤ 俊成の明確な古典意識の理由
- ⑥ ねつ造された古典的書物の歴史

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は、解答番号 18 の二ヶ所にマークすること。

- ① 藤原俊成は「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」という流行語を生み出し、当時の歌人たちから歌仙として尊敬されていた。
- ② 和歌の表現は『源氏物語』に典故を求めることが決められていたため、藤原良経の「草の原」歌は『源氏物語』に拠ったことが明らかである。
- ③ 『狭衣物語』という作品は『源氏物語』の影響を受けて成立したが、読者に本文を書き換えられてしまった結果、価値が低下したというわけではない。
- ④ 物語や和歌の評価は、内容ではなく、院・天皇のような高貴な身分の人が成立に関与したかどうかで判断されていた。
- ⑤ 藤原俊成・定家は、院・天皇の下の権力集団に属していたため、彼らの命に従って、権威のある古典を認定する任務に当たっていた。
- ⑥ 藤原俊成が『源氏物語』を古典として重視した理由は、当時、平家が台頭してきたため、源氏としてのアイデンティティーを確保したかったからである。
- ⑦ 藤原俊成が古典を重視した背景には、起源的書物を持たないと現在と過去とが断絶してしまうという危機意識があった。
- ⑧ 藤原俊成は何よりも知識の豊富さを重んじたため、注釈書を有する作品のみを古典と認定し、権威化を行っていた。
- ⑨ 『六百番歌合』には、藤原俊成が『源氏物語』から基本的教養を身につけていない歌人を批判する言葉が書き留められている。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 50)

甲

私たちは生まれてからこの方、啓蒙主義(enlightenment)、言い換えれば、^A理性第一主義の教育を受けてきたと言っても過言ではありません。しかし、理性だけが絶対で、それ以外は間違いであるという考え方は、好ましくないものなのです。

私たち現代人がいつのまにか洗脳された啓蒙主義とは、文字通り、蒙を啓く、蒙とは「知恵が足らない・文化が低い」、啓とは「導く・教える」ということです。英語でもエンライトメント、つまり光によって明るくするということです。

近代哲学の祖であるデカルトは、理性のことを「自然の光」(lumen naturale)と呼び、『方法序説』の第一部で、「良識(理性)は万人に共通するものである」と高らかに謳い上げています。

十七世紀に端を発するこの考え方は、「自然の光」としての人間本来にある「理性」に全面的に^aシンプクし従うことによって、未成熟な状態から抜け出し、理性的自立的な人間になる、またはそういう人間の世界を目指すというものです。^Bこの理性の「光」が及んだところが科学的な世界であり、人間はそうあるべきだとする考え方は、広く西欧社会に広まってきました。

この啓蒙主義が、西欧では十七～十八世紀の市民運動の台頭とともに時代の主流となり、同時に躍進していた近代科学と歩調を合わせるように、全世界に広がっていくわけです。

日本でも、明治政府が開国によって啓蒙主義を採用し、理性という「光」を重視し、それ以外のものは数段低く見るようになってしまったわけです。

理性だけで幸せになれるか

しかし、「理性」だけで人間は幸せになれるのでしょうか？ 良い社会が築けるのでしょうか？

「理性」という光にだけ重きを置いてよいものでしょうか？

例えば、木の葉や向日葵の花は「光」を志向して、その生命力を謳歌します。向日性の存在です。しかし、木の葉や向日葵が存在するのは、根があるからです。根は光に背を向け、「闇」の地中を這います。背日性の存在です。そしてその根の部分がしっかりと、深く張っていれば張っているほど、向日性の部分が健全になるのです。

逆に根の部分が弱ければ生命全体が駄目になってしまいます。生命体にとっては、「光」の部分も大切ですが、^cそれ以上に「闇」の部分が大切なのです。

ゲーテ(一七四九～一八三二年)は、「あかつきの薄暗いうちからいち早く起き出して太陽を待ちこがれていたのに、太陽が上がってくると、目がくらんでしまうような人の気持ちを私は学問において味わった」と言っています。

また、ベーム(一五七五～一六二四年)は「光が認められるのは闇のおかげである」と言っています。「光」だけの世界は人間にとって、^{まばゆ}目映すぎる世界、息苦しい世界、心休まらない世界なのかもしれません。

二十一世紀を迎えて、近代思考の崩壊が叫ばれる一方で、超常現象やオカルティズムが脚光を浴び始めています。これは人間本来のあり方を考えた時に「闇」の部分をそんなに軽視したり、否定

(注1)

していいものだろうかという懐疑の動き、もしくは反省の動きともとれるのです。

そう考えると、私たち現代人は、やはり、「闇」、特にオカルトのようなものに対して、一度、^P真
正面から捉え直す必要があると思うのです。それが正しい人間観を構築する^bイシズエともなると思
うのです。

「オカルト」とは何か

そもそも「オカルト」という言葉は、どこから出てきたものでしょうか？

これもやはり十七世紀に遡ります。当時発生した近代科学の最大なる特徴は、何でも客観的に分
析していくという手法を最重要視したこととです。客観的な分析とは、誰でも検証が可能であること
です。しかしそうでないもの、例えば、すこぶる個人的であり、誰でも検証可能ではない錬金術や
占星術といったものは、秘儀めいたもの、つまりオカルト・サイエンス（隠された学問）と呼んだ
のです。

オカルト (occult) という単語は、元来「隠す」を意味するラテン語オクレレ (occulere) の過
去分詞から出たもので、当時の社会では一般的に使われていました。ですから、単によく分からな
いものに対しても使われていたのです。

しかし、時代が下るにつれ、近代科学が社会に浸透し、一方でオカルト・サイエンスはますます
人目につかないようなところとするものとなり、ついには、^{ひなた}日向の学問である近代科学や理性を教
える学校ではタブーとなっていくわけです。

オカルトと近代科学の分かれ目はきわめてあやふやな面があります。というのも、その時代の知
識や技術で分析可能なものが近代科学の I で、そうでないものはどうしてもオカルトと
なるからです。

例えば、^{かんてんぼうき}観天望気なども、湿気や雲の発生メカニズムが分かるようになって初めて科学的な評価
がされるようになりましたが、以前は当たるも^{はのけ}八卦当たらぬも八卦の世界のものと思われていたも
のです。また、動物や植物の地震予知がマスコミなどで取りざたされていますが、学界的な評価か
ら言えば、あれもまだオカルトの世界と言えるでしょう。^E

「オカルト」に対する姿勢とは

こういつた科学とオカルトに対するあり方として、カント（一七二四～一八〇四年）は^oケイチヨ
ウすべき言を残しています。『視靈者の夢——^{けいじょうがく}形而上学の夢によって説明されたる』という風変わ
りな本が彼の著としてありますが、これはスウェーデンボリ（一六八八～一七七二年）という卓越
した学識者でありオカルティストであった^(注二)当時の話題の人物についてどう思うか、友人に請われた
カントが書き記したのです。

その中でカントは、

「オカルトの世界は科学で扱えないだけであって、決して否定できる世界ではない。ただ自分は
学者だから、科学的アプローチしかできない」

と言っています。

^Fこれと相通ずることを孔子も「子は怪力乱神を語らず」とか「鬼神を敬してこれに遠ざかるは知

と謂うべし」と言つて、神霊や靈魂の世界は敬つたりするが、口にはしないという態度を取つています。

私はそれが理性者の立場だと思ひます。オカルトの世界を絶対的に否定するのではなく、また理性の世界しか存在しないと云ひ張るのでもなく、「光」と「闇」の二つの存在が共存することを認めながらも、「光」の部分に対しては「光」の、「闇」の部分に対しては「闇」の接し方をすることがカンヨウと考へます。

というのも、人間にとつてこの二つは欠かせないものであり、それぞれに正しい取り組みをしなければならぬからです。どちらか一方を欠いても、それはたぶん、いい生き方にはならないでしょうし、まかり間違えば人生を誤つてしまいます。

特に現代人は、「闇」のほうの教育や経験が乏しいだけに、注意が必要です。その一つが宗教や死後の世界です。

近代科学という「光」は、すこぶる主観的である宗教に対しては、その「光」が及ばないところ、つまり非科学的だとして無視してきたからです。それは教育の現場だけでなく、マスコミにおいても、また社会の一般的な会話においても、タブー視してきました。それだけに、私たちは、いいオカルトかそうでないかを見分ける選別眼は

II

と言へるでしょう。

そんな中で私がお勧めする選別法が、キリストの次の言葉です。

「樹はその果実によつて知られる」(マタイ伝一二・三三)

ある樹が良い樹か悪い樹か、その果実によつて分かります。ある新興宗教がいいか悪いかは、それを信じている人の行動や顔つきから判断すればいい。あるオカルト的な薬やリョウホウが効くか効かないかは、服用している人の様子を見ればいい。

樹は土中の根っ子の部分は見ることができません。言い換えれば、「闇」は元来「光」では見えないから「闇」なのですから、「光」で「闇」を見ようとしても無理です。実体など分かりませんとするならば、草木の根っ子が健全かどうかは、その草木が咲かせる「光」の部分である花や果実を見ればいいわけです。それしか方法がないわけです。また、そうするうちに「闇」の世界を見分ける眼・感じ取る眼もついてくるでしょう。

それを、「光」で見えない「闇」の世界を認めるのは理性ある人間のことではないと、否定的な態度をとることは、大いに問題だと思ひます。

ゲーテの言葉に、

「考へる人間の最も美しい幸福は、窮め得るものを求めて、窮め得ないものを静かに崇めることである」

というものがあります。心中に留めておきたい

III

です。

(渡部昇一「知的人生のための考え方 わたしの人生観・歴史観」(PHP研究所2017年))

(注一) オカルティズム…オカルト信奉。

(注二) オカルティスト…オカルト信奉者。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は 19 ～ 23。

a シンブク

19

b イシズエ

20

c ケイチヨウ

21

d カンヨウ

22

e リヨウホウ

23

問2 空欄 I ～ III に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 24 ～ 26。

I

① 限界

② 圧巻

③ 特徴

④ 範疇はんちゆう

⑤ 限度

⑥ 長所

⑦ 特権

⑧ 機微

24

II

① 無視

② 不要

③ 達眼

④ 炯眼けいがん

⑤ 未熟

⑥ 不徳

⑦ 慈眼

⑧ 重視

25

III

① 流言

② 苦言

③ 遺言

④ 讒言ざんげん

⑤ 虚言

⑥ 狂言

⑦ 有言

⑧ 箴言しんげん

26

問3 傍線部 A「理性第一主義」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 良識や感性よりも人間が本来もつ理性を重んじる考え方
- ② 理性に則った行動をすれば幸福に導かれるとする考え方
- ③ 理性だけが絶対であると人間の感性を全否定する考え方
- ④ 知恵足らずの者は光を当てて救出すべきだとする考え方
- ⑤ 理性に屈服することで人間の悟りが開けるとする考え方
- ⑥ 合理的な思考をもたらず理性を最も重要だとする考え方

問4 傍線部B「この理性の『光』が及んだ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 理性的な人間が政治的統治を行う
- ② 理性によって気持ちが明るくなる
- ③ 理性が人間を洗脳し、自立させる
- ④ 理性によって判断がなされていく
- ⑤ 理性により人間が幸せに導かれる
- ⑥ 理性により市民運動が広がりゆく

問5 傍線部C「それ以上に『闇』の部分が大切なのです」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 「光」ばかりが当てられてしまうと生命体はかえって駄目になってしまい、適度な「闇」がないと生息できないから。
- ② 「光」を志向することで生命体は生命力を大いに活かしていくが、「闇」に相当する根の部分^いが弱いとそもそも生命を失うことになりかねないから。
- ③ 「光」さえあれば生命体は生命を維持することができるが、「闇」に当たる根っ子の部分で実は「光」を取り込んでいるから。
- ④ 生命体にとって生命力を謳歌していくためには、「光」と「闇」の適度なバランスが重要であり、「光」だけでは生息できないから。
- ⑤ 生命体にとって生命力を謳歌していく上で、「光」は必ずしも不可欠なものではなく、「闇」に当たる根の部分が鍵を握っているから。
- ⑥ 生命体にとって「闇」の部分は「光」を「光」として感じる上で必要不可欠なものであり、「闇」があつての「光」であると言えるから。

問6 傍線部D「真正面から捉え直す必要がある」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 正しい人間観を構築するためには、近代思考を完全に崩壊させた上で、超常現象やオカルティズムの解明をしていくことが求められるから。
- ② 正しい人間観を構築するためには、「理性」重視の姿勢を一度全否定した上で、超常現象やオカルティズムといった「闇」の部分に注目していく必要があるから。
- ③ これまで「闇」の部分については軽視や否定がなされてきたが、人間本来のあり方を考える上で「理性」だけでなく「闇」の部分についても真剣に考える必要があるから。
- ④ 二十一世紀になってから、「光」だけの世界は人間にとって息苦しい世界であるという気づきが生まれ、「光」よりも「闇」を上位に置こうとする反省が起きたから。
- ⑤ 二十一世紀の心休まらない世界に疲れたため、正しい人間観の構築を目指して、オカルトの世界に安息を求める動きが強まったから。
- ⑥ 二十一世紀を迎えてから、「理性」があると幸せにはなれないことが明らかとなり、オカルトのような「闇」の部分の解明が正しい人間観の構築には必要であるから。

問7 傍線部E「あれもまだオカルトの世界と言えるでしょう」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 動物や植物の地震予知はマスコミで取りざたされているだけの次元が低いものだから。
- ② 動物や植物の地震予知はオカルト・サイエンスへの反省によって誕生したものだから。
- ③ 動物や植物の地震予知は近代科学がタブーとする秘儀めいた手法を推奨しているから。
- ④ 動物や植物の地震予知は近代科学を尊重しないマスコミによって支持されているから。
- ⑤ 動物や植物の地震予知は科学的に検証が可能な客観的手法に全面的に頼っているから。
- ⑥ 動物や植物の地震予知は現在の知識や技術をもって分析可能なものとは言えないから。

問8 傍線部F「これ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① カントがオカルトの世界を否定しない一方で、自らは科学的接近法しか採らなかつたこと。
- ② カントが『視靈者の夢』という本を書くことで、自分が科学者であることを強調したこと。
- ③ カントが卓越した学識者スウェーデンボリのオカルト信仰を意外にも高く評価したこと。
- ④ カントがオカルトの世界を科学的に扱うことを断念し、科学的アプローチを重視したこと。
- ⑤ カントが科学とオカルトに対する正しい態度について市民たちを啓蒙しようとしたこと。
- ⑥ カントがオカルトの世界ではなく、むしろ科学の世界で生きていくことを決意したこと。

問9 傍線部G「理性者の立場」に該当するものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① オカルトの世界を絶対的に肯定する。
- ② 「光」と「闇」が共存することを認めない。
- ③ 理性の世界しか存在しないと高唱する。
- ④ 理性だけでは幸せになれないと気づき、人生を誤らない良き生き方をする。
- ⑤ 「光」で見えない「闇」の世界を認めつつ、「光」の部分には科学的な接し方をする。
- ⑥ 新興宗教に対して全く認めず、否定的な態度をとる。

問10 傍線部H「私がお勧めする選別法が、キリストの次の言葉」である理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 「闇」は元来「光」では見えないから「闇」である以上、「闇」について選別を行うこと自体に無理があり、むしろ「光」の部分にのみ着目することで「闇」の世界を見分ける眼や感じ取る眼が自然と備わっていくものと考えられるから。
- ② 「闇」は元来「光」では見えないから「闇」である以上、「闇」について見誤ることがないように注意すべきであり、そのためには「闇」がもたらす花や果実といった健全な「光」の部分に注意を払って見きわめるのが最も望ましい方法であると考えられるから。
- ③ 「闇」は人間にとって目に見えないところのものであるので、「闇」の世界を認めるのではなく「光」の世界を注視すればよく、それによって「闇」の世界を見分ける眼・感じ取る眼もついてくると考えられるから。
- ④ 「光」で「闇」を見ようとするのは無理であるがゆえに、「闇」の部分を評価するためには「光」の部分を見るしか方法がなく、またそうした方法を積み重ねることで「闇」の部分の良し悪しを識別・察知する眼も養われていくと考えられるから。
- ⑤ 「光」で「闇」を見ようとするのは非科学的な方法である以上、「光」の部分で「闇」の部分を判別せざるを得ず、そうした過程を経っていくことで「闇」の世界を見分ける眼・感じ取る眼を体得できるようになると考えられるから。
- ⑥ 「闇」の部分に対しては「闇」の接し方が望ましいので、「光」の接し方をもって「闇」の部分を見る科学的な方法を採用のではなく、「闇」の世界を見分ける眼・感じ取る眼が備わっていくように「闇」の部分だけを見るのが最良であると考えられるから。

問11 空欄

甲

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は

35

- ① 「自然の光」たる「理性」の弊害
- ② 理性第一主義に拠^よって立つ現代人
- ③ 理性的自立的な人間が目指す社会
- ④ 近代哲学の祖デカルトの哲学思想
- ⑤ 啓蒙主義の教育と市民運動の台頭
- ⑥ 明治政府が行った啓蒙主義の採用
- ⑦ 現代人を洗脳する啓蒙主義の歴史
- ⑧ 現代人を洗脳する啓蒙主義の未来

問12

次の(ア)～(ケ)のうち、本文の中で著者が言及している「闇」の部分に分類されるもの

は全部でいくつあるか。解答用紙のマーク欄①～⑨から一つ選べ。解答番号は

36

- (ア) 錬金術
- (イ) 啓蒙主義
- (ウ) 超常現象
- (エ) 草木の根っ子
- (オ) 死後の世界
- (カ) 客観的な分析
- (キ) 新興宗教
- (ク) 八卦
- (ケ) 動物や植物の地震予知

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は、解答番号 **37** の二ヶ所にマークすること。

- ① 理性ある人間になるためには「闇」の世界を全否定するのではなく認めることも必要であるが、そのためには「光」で「闇」を見ることを重ねることによって「闇」の世界を見分ける眼・感じ取る眼を身につけていくことが求められる。
- ② 誰でも検証可能ではない錬金術や占星術は秘儀めいたものすなわちオカルト・サイエンスと呼ばれることになり、近代科学が社会に浸透していく中でタブー視されていたが、そのことによりオカルトと近代科学は明確に分別されることになった。
- ③ 近代科学という「光」はすこぶる主観的であり、その「光」が及ばない宗教に対しては非科学的であるという理由で無視してきたが、宗教は教育の現場やマスコミ、さらには社会の一般的な会話においてもタブー視されてきた。
- ④ 人間は明るい「光」だけの世界では息苦しく幸せになることができないから、超常現象や宗教に心の平安を求めてきたが、そのことは合理的な近代科学と非科学的なオカルトの対立として近代社会に大きな問題をもたらすことになった。
- ⑤ 現代人は理性第一主義によっていつのまにか洗脳されてしまい、明治政府下の日本においても理性という「光」が重視される一方で、この理性の「光」が及ばないものについては軽視されてしまうことになった。
- ⑥ 人間にとって「光」の部分も「闇」の部分もともに不可欠なものであり、いずれかを欠いても良い生き方にはならないが、「光」の部分に対しては「光」の、「闇」の部分に対しては「闇」の接し方をしなければならない。
- ⑦ 土中の根っ子の部分が見えない樹について良い樹であるか悪い樹であるかを見分けるためにはその果実に着目すればよいのと同じように、あるオカルト的な薬に効果があるかどうかを知るには、その薬を飲んでいる人の様子を見ればよいとキリストは教えている。
- ⑧ 西欧では十七～十八世紀の市民運動の台頭によって近代科学が目覚ましい発展を遂げることになり、これに伴う形で理性を重んじる啓蒙主義が時代の主流の座につきやがて全世界に広がっていくことになった。
- ⑨ スウェーデンボリという卓越した学識者でありオカルティストでもあった友人に関する風変わりな著の中で、カントはオカルトの世界を否定せず、「自分は学者だから、科学的アプローチしかできない」と書き記した。